

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる——そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

ツバキに協力し、共に過こし、〈カタストロ〉に対する方針を固めていく中で、やみひめは彼女と自分が違う環境で生きてきた事を実感する。それをきっかけに、一時的に気まずい雰囲気になってしまふが、想い人であるアサトの助言を得て、ツバキに歩み寄る事に成功する。

距離を縮める事で浮き彫りになる現実と、それを乗り越え、理解しようとする事の大切さ、理解し合える喜びを知るのだった。

登場人物

◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

静謐なはずの夜の公園に、金属が打ち合う硬質な響きがあった。その音の発生源は、歳若い——いっそ、幼いと言った方が似つかわしい二人の少女だ。見た目は十歳をいくつか過ぎたくらいの年齢で、小学生の高学年といったところだろう。

一人は長い黒髪をポニーテールにしており、少し吊り目の琥珀のような橙色の瞳が印象的だ。彼女は和服とミニスカートを組み合わせたような衣装を身に纏っており、手にはメカニカルな意匠の白い剣を構えている。

しかし、それらを遥かに凌駕する特徴がまだある——頭頂部に生えた狼のような耳と、腰から生えた同じく狼のような尻尾だ。特異な服装と同じく、仮装趣味の一部にも見えるが、少女の表情に合わせて微妙に動いている。

彼女と対峙しているのは同じくらいの年頃の少女で、こちらはセミロングの黒髪を左側で結ってサイドポニーにしている。蒼玉のような青い瞳は、表情と同じ澄んだ色を湛えており、ポニーテールの少女より余裕が窺える。

「落ち着いて、相手の動きをよく見てください。今の貴女は動体視力が強化され、反射神経と肉体強度も、それに対応出来るようになっていきます。私の攻撃くらい、楽に防げます」サイドポニーの少女は澄まし顔でそう言い、手にした金属バットを振り回す。ポニーテールの少女と違い、その身に纏っているのはごく一般的な少女の服装なので、逆に異常とどうか、猟奇的な状況に見えてしまう。

「そ、そう言われても……ひゃッ!？」

サイドポニーの少女の金属バット攻撃を剣で受け、しかし足元を払われたポニーテールの少女が、悲鳴を上げて尻もちをついた。

『——まだだ、やみひめ!』

「え? うわあ!?!」

地面に座り込んでしまった少女に、サイドポニーの少女は容赦なく金属バットを縦に振り降ろす。ポニーテールの少女は、それを間一髪で左に避けたが、それを更に金属バットが追隨してくる。

間違いない直撃コース。その一撃はポニーテールの少女の側頭部を陥没、もしくは砕き、その生命活動を終わらせていただろう。

しかし——

「いけませんよ、(カグツチ)。貴女が手を貸しては訓練になりません」

『訓練と言うなら私情を挟むな。其方らしくないな』

澄まし顔を少しだけ不満そうにし、サイドポニーの少女が言うと、先ほどもしたスピーカーを通したような女性の声が答えた。

「あら、何の事でしょう？」

『ふん。しらを切るなら、それでも構わん』

サイドポニーの少女が言葉に向けているのは、金属バットを受け止めた少女ではなく、受け止めた剣の方だった。機械音声も剣自身が発しているようだ。

「へ？ へ？ どうなってるの……？」

両者の会話を呆然と聞いていたポニーテールの少女が、我に返ったのか、混乱を引きずった様子で声を発した。

先ほどの必殺の一撃と思われたサイドポニーの少女の攻撃を、ポニーテールの少女は恐るべき反射速度で受け止めた。それまでの動きからは信じられないような動きでだ。

「今のは、〈機獣少女〉を護るための緊急避難措置です。MBデバイスが使用者の生命の危機と判断した場合、独自の判断で使用者を護る。今のは、〈カグツチ〉が一時的にやみひめさんの身体を操作し、私の攻撃を防いだんです」

サイドポニーの少女が澄まし顔に戻って説明した。

「そんな機能もあるんだ……って、ツバキ、それって今の攻撃がかなり危なかったって事？」
「まさか。ちゃんと寸止めするつもりでしたよ」

ポニーテールの、やみひめと呼ばれた少女がジトツとした目で言うと、ツバキと呼ばれたサイドポニーの少女は悪びれた様子もなく答えた。

「……〈カグツチ〉、本当だと思っ？」

『普段のツバキであれば、冗談でこんな事はせぬ。しかし、今日は其方から色々と辱めを受けておったからな……』

やみひめが手にした剣に向かって訊ねると、件の機械音声マシン・ヴォイスが、やや逡巡するように答えた。〈カグツチ〉というのが剣の名前らしい。

「えっと……ツバキ、廃ビルでの事、まだ怒ってる？」

〈カグツチ〉の言う『辱め』の内容に心当たりがあるのか、やみひめは機嫌を窺うようにツバキに訊ねた。

「いいえ。まったく。毛筋ほども気にしてません。やみひめさんは、私がそんなに器量の小さい人間だと思ってるんですか？」

「ううん！ 全然、思ってないよ！ ツバキは寛大だもんね！」

やみひめでなくても、こう答えるしかなかっただろう。ツバキの表情はとても穏やかなはずなのに、形容しがたい強い圧力を放っていたのだから。

「どうしよう、〈カグツチ〉!? ツバキ、やっぱり怒ってるよ!? 激おこだよ!？」

『そのようだな。時にやみひめ、『おこ』とは何だ？』

ツバキに聞こえないように助け船を求めるが、〈カグツチ〉はやみひめの言葉に聞き慣れない単語を見つけ、そちらに興味は移ってしまった。遠回しな『私に訊くな』という意思表示かもしれない。

「何をこそ話しているんです？ さあ、訓練を再開しますよ」

「……私、無事に帰れるのかな」

有無を言わさぬツバキの迫力を前に、やみひめは力なく独りごちた。



波乱の始まりから四日が経過した火曜日の夜。〈カタストロ〉対策として始めた夜の日課も今夜で二日目になる。日中は気まずくなくなってしまったツバキとの和解を果たしたが、その余波をこんな形で受ける事になるとは、当のやみひめも思っただろう。事の発端はツバキのコンプレックスである胸を、やみひめが弄もてあそんだ事だが、それは執拗ほおに類をつねられるという罰を受けた事で清算されたと思っただけから。

「――では、今夜の訓練はこのくらいにしておきましょう。おつかれさまでした、やみひめさん」

「……はあ……はあ……おつかれ、さまでした……うへえ」

汗一つ流した様子もなく、澄まし顔で告げるツバキに対し、やみひめは『疲労困憊』というタイトルで写真に収めれば、賞を取れるレベルに憔悴しやうすいしきっていた。

『災難だったな。まあ、良い教訓になったと思うしかない』

ベンチに腰を下ろし、荒い呼吸を繰り返すやみひめに、〈カグツチ〉が機械音声マシン・ヴォイスで劳いの言葉を掛けていた。その口調には苦笑が浮かんでいる。

今夜は〈カタストロ〉を誘い出すための機力きりよくの放出を行い、それからツバキの提案で戦闘訓練を行っていた。いざ実戦になった際は、〈カグツチ〉がやみひめに代わって戦う事はツバキも了承済みだが、不測の事態に備え、心構えも兼ねて訓練をしておこうとツバキが提案したのだ。

しかし、実際に訓練が始まってみれば、それは実戦さながらの『戦闘』だった。やみひめの父親が所有していた金属バットを倉庫から持ち出し、ツバキはこれを得物えものに〈機獣少女〉状態となったやみひめと対峙した。MBジャケットに護られ、身体能力も強化されたやみひめだが、実戦経験の差から、生身のツバキに対して防戦一方という結果に終わってしまった。

これには、〈カグツチ〉が前述したように、ツバキの私情も多分に含まれていたのだろう。

要はやみひめのセクハラに対する仕返しだ。

「……もう絶対にツバキを怒らせるような事はしない」

『それがいい。もつとも、私としてはツバキの新たな一面を引き出してくれる事自体は歓迎だがな』

ようやく呼吸が落ち着いたらしいやみひめの言葉に、〈カグツチ〉は意地の悪い含みを持たせた言葉を返す。

「他人事だからって……」

『うむ。他人事だからな』

ジトツとした視線を向けるやみひめに対し、〈カグツチ〉はどこ吹く風だ。〈カグツチ〉はMBデバイスに搭載されたMBコアの欠片かけらであり、元は『機獣』と呼ばれる金属生命体である。だが、その口調や思考は人間のそれに限りなく近い。だから、やみひめも人間の女性のような気持ちで〈カグツチ〉に接している。

「——どうぞ、やみひめさん」

〈カグツチ〉と他愛ない会話をしていると、ツバキがすぐ側そばに来ていた。その左手には金属バットの代わりに、赤い水筒が握られており、やみひめに差し出された右手にはレジヤ―用のコップがあった。

「ありがとう。ツバキ、こんなの持ってきてくれたんだ」

ツバキから受け取ったコップの中身はスポーツドリンクだった。口に含むと、ほど良い甘味と冷たさが、疲れた身体と喉のどを潤していくのを感じる。

「お母さまからお借りしてきました。必要だろうと思ひまして」

やみひめに返事をしてから、ツバキも自分のコップにドリンクを注ぎ、こくりと喉を鳴らした。その様子は不思議と気品があり、ここが夜の公園である事が場違いに思えた。

「ツバキって、普通にしても絵になるよね」

「なんです、急に?」

口を突いて出てしまったやみひめの感想に、ツバキがきよとんとした顔をする。それは普段の澄まし顔とは違う、歳相応の女の子の表情に見える。

「可愛いなって。護ってあげなくなるタイプ?」

「……私、口説かれます?」

「あはは。でも、私が男の子だったら口説いちやうかも」

「……少し、嬉しいです」

やみひめにそんなつもりはなかったし、『口説いちやうかも』というのも冗談のつもりで言ったのだが、ツバキの反応リアクションは予想に反したものだ。照れている訳ではなく、し

んみりしているというか、少なくとも茶化していい雰囲気ではなかった。

「ずっと〈機獣少女〉として戦ってきました。護られる側ではなく、護る側だったので、そんな風に言われたのは初めてです——」

ツバキは自分とは違う。文字通りに住んでいる世界も、考え方も、価値観も。考えなしに発言した事を、やみひめは少しだけ後悔した。

「ツバキは、本当に好きな人とかいないの？」

今更、話を変えるのも白々しい気がして、やみひめはこの話題を広げる事にした。以前、同様の質問をした際、ツバキは『いない』と答えた。だが、あれから距離が縮まった今なら、違った答えが聞けるかもしれないと期待して。

「本当にいませんよ。私は〈機獣少女〉ですから、言わば惑星ゼヘナ最強の存在です。力がすべてとは言いませんが、〈機獣少女〉を引退するまでは、男性に対して憧れのようなものを抱く事はないと思います」

ツバキの口調や表情からは達観のようなものが感じられ、少なくとも、同年代の少年に対して恋心のようなものを抱く姿は想像出来ない。

「それって、ツバキが〈機獣少女〉になったから、そう感じるって事？」

「そうかもしれませんし、そうじゃないかもしれません。私が恋愛に対して関心が持てない事への言い訳に、〈機獣少女〉を利用していただけなのかもしれませんから」

ツバキ自身も本当に判らないのだろう。そう言っって苦笑を浮かべる彼女の表情には、そんな自分に対する悲しみのようなものも浮かんでいるように見えた。

「ツバキって、難儀な子だね」

「はい。自分でもそう思います」

「でも、いつか逢^あえるといいね。ツバキが好きになれるような素敵な人に」

「やみひめさんにとつての 橘^{たちばな}さんのような人——ですか？」

ツバキが少しだけからかうような口調で言った。『難儀』と言われた事への軽い意趣返し のつもりだったのだろうか、やみひめは気付いていないようだった。

「えへへ。あ——でも、アサトは駄目だからね」

「大丈夫ですよ。やみひめさんには悪いですが、ダメ人間は守備範囲外です」

「うー。アサトは確かにダメ人間だけど……でも、それでツバキがライバルにならないなら、ダメ人間でもいいよ」

「ふふふ。こんな話、橘さんには聞かせられませんね」

それから、しばらく雑談をして時間の経過を待ち、〈カタストロ〉が現れる気配がない事を確認して、今夜の日課は終わりを告げた。

第九話

『機獣少女と小さな秘密』

週が明けて三日目の水曜日。

もう完全に通常運転だから、普通に起きて、普通に身支度を整えて、普通に朝食を摂りにリビングに行く。普段と違うのは、起こしてくれるのがお母さんじゃなくてツバキな事だけど、それも三日目になると慣れてしまっ。

……うん、ちゃんと目覚ましをかけて一人で起きないと駄目なのは判ってるけど。

「おはよう、お母さん」

リビングで朝食をテーブルに並べてるお母さんにあいさつをする。お父さんは満員電車が嫌いだからっていう理由で、ラッシュを避けるためにすごく早い時間に家を出るから、平日の朝に顔を合わせる事は滅多にない。

「おはよう。早く食べないと、あんまり時間ないわよ」

「うん」

私が席に着くと、先にリビングに来ていたツバキが飲み物のオーダーを取ってくれる。なんか、ウエイトレスさんみたい。

「やみひめさん、牛乳とオレンジジュース、どちらにしますか？」

「うくん……牛乳にしようかな」

本当はオレンジジュースが好きだけど、最近、牛乳を飲んだ方がいかもしれないって思うようになったから。

「……やみひめさん、今、どうして私の顔から少し視線を下げたんですか？」

その理由は目の前にいるツバキで、私より一つ歳下なんだけど、部分的にすごく大人で、その大人な部分を無意識に注視してしまったらしい。ツバキはそれをコンプレックスに感じているので、すごく形容しがたい表情をしている。大部分は恥ずかしさだと思うけど、わずかに怒ってるような雰囲気もあって、ちょっとだけ身の危険を感じる。昨日みたいに頬をつねられたり、昨夜の訓練みたいに扱かれるのは勘弁してほしい。

「む、胸なんて見てないよ!!? ただ、今朝のツバキが普段より可愛かったから、照れて目をそらしちゃっただけ! 胸なんて見てないからね!」

駄目だ。これじゃあ、ツバキの胸を見て牛乳を選んだって自白したのと同じだ。

「……やっぱり、そこを見てたんですね。やみひめさん、セクハラです」

ツバキの表情から恥じらいが消えて、ジトツとした目で見られてしまった。今夜の訓練もハードモードかな……。

『——昨日、路上に倒れていた女子大生が、付近の住民の通報で県立病院に運ばれました』
テレビからは国営の朝のニュース番組が流れてて、今は各局の地元のニュースが報道されてきた。

『女性はK大学に通う二回生の夕月リンさん二十歳で、外傷はありませんが、昏睡状態により、事情聴取は行われておらず、詳細は不明です。警察の調べでは、夕月さんが発見された付近で不審な女性の姿が目撃されており、事件の可能性を踏まえて調査を行っているとの事です』

「お母さん、今のニュースって市内だよな？」

K大学は市内にある大学で、たしか神讓先生の通ってる大学だったはず。今は特別教育実習生として私のクラスの担任をしてるけど、実際には大学生。

「ええ。嫌ね、事件だったら」

お母さんはなんでもない風を装ってるけど、本心では私がショックを受けてないか心配してくれてるんだと思う。私も今年の夏に事件に遭ってるから。

「人気のない所に行っちゃ駄目よ？ 出来れば一人で行動もしない事。OK？」

「はい」

だから私も、なんでもない風を装って返事をする。他人だったら危機感がないと思われるかもしれないけど、きつと、お母さんは判ってる。

「よろしい。ほら、早く食べて学校に行く」

入院してるお姉さんには悪いけど、私はただの小学生で、警官でも自衛官でもない。《機獣少女》ではあるけど、それは人間同士の問題に使っていい力じゃない。だから、普通の小学生に出来る事しか出来ない。これから学校に行って、放課後はアサトに逢って、その後は《機獣少女》のお仕事。

最後のは普通の小学生のやる事じゃないけど。

ただ、お姉さんの回復と、事件じゃない事を願うくらいはいいよね。



小学校に登校すると、今日も、くらは欠席だった。

しかも、神讓先生も一身上の都合でお休みで、ホームルームは副担任の斑鳩先生——実際にはこちらが本来の担任——がやってきた。病気じゃないから心配は要らないと思うけど、毎日顔を合わせてる人が学校に来ないのは不思議な感覚。くらがが学校を休んでる事と、関係ないよね。



今日もつつがなく授業は終わり、帰りのホームルームで斑鳩先生いかるがが今朝のニュースの事を挙げて、事件の可能性もあるから気を付けて帰るようにと告げて、放課後を迎えた。いつもの癖で、後ろの席のくらうと一緒に帰ろうと言おうとして、今日も欠席だった事を思い出す。二日やそこらじゃ、習慣は抜けないみたい。

「……くらう、どうしてるかな」

斑鳩先生きに訊いても、詳しい事は教えてもらえなかった。入院してるとかじゃないみたいだから、家にはいるんだろうけど。

「あれ……？」

考え事をしながら、いつもの通学路を逆に進んで、アサトがいるはずの公園に着いたんだけど……アサトがいない。普段は絶対に先に来て、ベンチでぼけっとしてるのに。

仕方なく、先にいつものベンチに座ってアサトが来るのを待つ。

ただ待つっていうのは、時間が経つのが遅く感じる。かといって、それまで何かをして時間を潰す気にもなれない。今か今かと、そわそわした気持ちで何かしても集中出来ないし。

そんな手持ちぶさた無沙汰な気持ちでいると――

「――すまん。遅くなった」

いつもの気怠けだるい表情と口調で、私の待ち人は現れた。

アサトだ。

「良かった。何かあったのかと思っちゃった」

体調を崩したとか、事故に遭ったとか、くらうや神譲先生かみじょう、今朝のニュースの事があるから、心配してしまった。

でも、アサトはなぜか妙に居心地の悪そうな顔をしてる。今日は高校の制服じゃなくて私服だし。

「どうしたの？もしかして、何かあったの？」

「いや、てっきり文句を言われる思ってたんで、そんな風にしおらしい態度で拍子抜けしたというか」

「……アサトが私の事をどういう目で見てたか、よく判ったよ」

アサトの馬鹿！もう心配なんてしてあげないんだから！

私がむくれていると、アサトは黙ってベンチの隣に座った。

そして――

「悪かったよ。さっきのは嘘だ」

そう言っつて、アサトは私の頭にぼんと手を置いた。

「嘘?」

「お前がしおらしい事を言うから、ちょっと照れ臭かったんだよ」

その言葉を聞いてアサトの方を向こうとしたら、頭に乗せられた手で動きを固定されて出来なかった。見えないけど、きつと見られたくない顔をしてるに違いない。うー……見たい。

それからはいつも通り。いつもみたいに、なんでもない話をして、ツバキと元通りになれた事も話した。その際、アサトはその事を知ってたみたいな反応だったけど、予想してたって事なのかな。

「——そうだ。あのね、アサト」

「ん?」

タイムリミットが来て、別れ際、私はアサトにお願いがあった事を思い出した。

「くろうがね、昨日から学校を休んでるの。怪我や病気とかじゃないらしいんだけど、詳しい事は判らなくて」

「そうか。心配だな」

「うん。でね、明日もお休みだったら、放課後にお見舞いに行こうと思って。それで……」

「ん。じゃあ、明日はここに来ないかもしれないんだな?」

私が言いにくそうにしてるのを察して、アサトは私が言おうとしてる事を言ってくれた。やっぱり、アサトは本質的には優しい人だと思う。

だから好きなのかな。

「うん。私、携帯持っていないから、ここで言っておこうかなって」

「そっか。判った」

アサトの返事はすぐあつさりしてて、それはいつもだけど、ちょっとくらい残念がってくれても罰は当たらないと思う。

「いいの?」

「どうせ、お前との約束がなくても来るんだ。だから気にするな」

そういえば、アサトと初めて逢ったのも、リハビリという名の逢瀬を始めるきっかけも、この公園だった。アサトがどうしてこの公園に入り浸ってるのか、気になって訊こうとした事もあつたけど、なんとなく今日まで訊けずにいる。

「……ねえ、アサト」

「まだ何かあるのか?」

知りたい。

でも、知るのが怖い。

そもそも、訊きいても教えてくれないかもしれない。

それが一番怖い。

だから――

「ううん、なんでもない。ごめんね、引き止めて」

「そうか？　じゃあな」

「うん。またね」

「ああ。クラウ、なんでもないといいな」

最後の言葉は私に背を向けながらだったから、アサトの顔は見えなかった。けど、きつと優しい顔をしていたと思う。



家に帰ると、ツバキが出迎えてくれた。一昨日おとといは家の前で待っていてくれて、昨日は廃ビルから一緒に帰ったから、こうして玄関を開けた先に待っていてくれると、少し不思議な感覚がする。

妹がいたら、こんな感じなのかな。

「おかえりなさい、やみひめさん」

「ただいま、ツバキ。……あれ？　何か良い事でもあったの？」

いつも通りの穏やかな澄まし顔なんだけど、妙に嬉しそうというか、そんな感じがツバキからした。

「ええ、とても良い体験をしました。でも、やみひめさんには秘密です」

「えー、教えてよ。ツバキがそんな風に浮かれるくらい良い事って何か、すごく気になる」

「駄目です。絶対に教えられません」

「そんな……。ねえ、〈カグツチ〉は知ってるんでしょ？」

ツバキは絶対に口を割りそうにないから、待機状態の黒い勾玉まがたまの姿でツバキの首に下げられてる〈カグツチ〉に訊きいた。

『……すまぬが、私には、パートナーであるツバキのプライバシーを守る義務がある。仮初かりそめのパートナーとはいえ、其方そなたであつても教えられん』

「えー。私だけ仲間はずれ……」

『……………』

食い下がってみたけど、〈カグツチ〉は教えてくれなかった。けど、自分の秘密をへらへら

ら他人に話してしまう。パートナーは嫌だから、そこは正しいと思う。

それに、ツバキにとって良い事があったなら、それは私も嬉しい。こんな事は考えるべきじゃないけど、〈カタストロ〉の問題を解決した後、ツバキが惑星ゼヘナに帰る方法なんて判らない。かなりの確率で無理だと思う。私には別の惑星に帰る方法なんて判らないし、地球の科学力じゃ無理だし、そもそも誰も信じないと思う……。

その場合、ツバキは地球こちで生きていかなきゃならない。そうなった時、素敵な体験がたくさんあれば、その覚悟もしやすくなると思うから。

それに――

「でも、良い事があったなら、良かったね。出来れば、いつか聞かせてね」

これからずっと一緒にいられば、実はあの時――なんて、思い出話として聞ける時が来るかもしれない。それはきつと……すごく素敵な未来だと思うから。

「はい。いつか、そんな時が来れば」

そう答えた時のツバキの表情は少しはにかんで、薄っすらと頬ほおも赤くなっていた。

……あ、駄目だ。やっぱり気になる！

「じゃ、じゃあ……今夜のお風呂の時にでも――」

「絶対に駄目です☆」

その笑顔は鉄壁で、〈難攻不落のツバキ〉という二つ名は伊達じゃないって思った。

本当に何があったんだろう……？

つづく

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第九話をお届け致します。

前回は伏線回だとすると、今回はワンクッション回というか、ジャンプ前のステップ回です。次回、サイドストーリーを挟んで、次話より本格的に終局に向けて動き出します。クラウはどうなったのか？ 神譲先生は？ あれ、ニュースの『夕月リン』って……？ とりあえず、第十話をお待ちいただけると幸いです。

……ちなみに、今回ページ数が少ないのは『スパロボ』ばかりやってたからです。

『天獄篇』、超楽しい。

いいかげん、わざわざあとがきで書く事もなくなって、そもそも、必要な事はちゃんと本編で書いているので、さつさと謝辞に移ります。

まずはチェックその他をしてくださっている紙白さんに感謝を。ありがとうございます。娘さん達は大切に扱わせていただきます。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

相変わらず綱渡りですが、このまま行けるといって行きます。願わくば、最後まで書ける事を。

2015/6/11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る